

—— 日 食 講 話 [1] ——

北海道の日食近づく

(山 本 生)

1936年六月19日の午後、我が日本の北海道に於いて皆既日食が見える筈であるといふ豫言は可なり以前から、〔天界〕や、其の他の新聞雑誌等にも現はれて、識者たちの注意を惹いてゐた。その日食の日が今や愈々一ケ年以内に迫つて來た。文部省内には平山信博士を長とする日食委員會が設けられ、東西の各大學では觀測の諸計畫や、いろいろの準備と共に、度々議會に豫算案も提出せられ、其れに關する討議や、質疑應答も繰り返された様子である。又、國內で都合よく皆既日食が見えるチャンスとしては、之れが40年ぶりであるといふので、近年勃興して來た我が國のアマチュア天文界も何となく計畫やら希望やら抱負の交換やらで賑はしい。事實、こんどの日食は、昨年二月14日の南洋上に於ける日食の時の如く、國內一般大衆に無縁のものではないのだから、いくら前景氣をあほつても、過ぎることはないと思はれる。

この1936年六月の日食は、天體曆の豫報する所によれば、アジアとヨーロッパの殆んど全部を掩ひ、其のほか、アフリカの東北部と、北太平洋の西北部、それに尙ほ北氷洋を越えて、北米大陸の北部にも及ぶ廣い範圍に於いて之れが見られるのであつて、只、英領インドの中部以南と、シヤムや佛領インドシナ、又、歐洲ではポルトガル等だけが此の日食の範圍外にある。——又、皆既線の通過する所は、先づ地中海に始まり、ギリシヤ、トルコ、カウカソス地方を経て、シベリヤの曠野を横斷し、バイカル湖の北をぬけ、少しく滿州帝國領内にも入り、沿海州から、我が北海道の北見の海岸に沿ふて南下し、根室から太平洋に入り、遠くミドエ島あたりで終るのであつて、延々13000キロの長きにわたり、殊に其の皆既線の大部分が陸地を通るのであるから、昨年二月の日食の時とは大に違つて、天氣さへ良ければ、觀測地は無限に多く與へられるといふ好いコンデションにある。故に、主な觀測區域を持つロシア國や我が日本帝國では早くより特別な調査や研究や計畫や、諸種

の準備が行はれ、交通、運搬、宿泊、通信等の方面にも熱心な考慮が拂はれてゐる次第であると共に、既に英國や米國や獨國からは日ソ兩國何れかへ觀測隊などを派遣する計畫が漏れて來てゐるし、其のほかにも、恐らくは佛國、伊國、蘭國等々多くの文化國からも何等かの觀測隊が日ソ兩國の何所かへ派遣されることと思はれる。

こんどの日食皆既線の通る所には、

ギリシヤ國：アテンス、

トルコ國：イスミド、ブルサ、

歐洲ロシヤ：ユブスカ、ベゾパスノエ、サシコルスク、

歐亞境上：グリニャンスク、ニコルスク、マリンスク、

シベリヤ：ペトロバウロフスク、オムスク、トムスク、オルレンガ、

バイガル湖北端、チャソフ、

滿ソ國境上：クマルスク、パイカン、

沿海州：ハバロフスク、

北海道：稚内、枝幸、網走、斜里、根室

等々、大小多數の都邑があつて、此等の多くには可なり立派な交通機關や宿舍の設備等もあるから、觀測者や、一般の觀覽者も便利を得ることと思はれる。

我が國の北海道は、明治29年八月9日に、北見の枝幸から釧路の沿岸へ通る皆既日食線に見舞はれた所であるが、正に40年ぶり、又元の線と殆んど同じあたりが、こんどの皆既線に當る。まことに、全世界を通じて稀に恵まれた場所と言はねばならない。觀測地は皆海岸に近い所であるから、汽船も汽車も共に便利で、自動車の道も殆んど遺憾なく出來てゐる。故に、交通にも、通信にも些の差支へは無い筈である。只、旅館の数が割合ひに少く、殊に長く滞在する觀測隊員たちを如何に待遇し得るか之れについては、北海道の公私各方面に考慮を促したいと思ふ。ごく内輪に見積つて、來年の日食を見るために、日本全國から北海道の北見方面に集る人は約100000人と見るべきであるが、近年、我が國內の天文熱は外國にも其の比を見ない程、隆盛なものであるし、それに、最近の交通關係者や大小無數のジャーナリストたちの宣傳力は偉大なるものであるから、ことによると、愈々の大切な觀測日あ

たりには、百萬の人が動くかも知れない。若し之れが實際とするならば、旅宿の混雑は言ふまでもないことであるし、尙ほ、交通機關は如何に之れを消化せんとするか？ どうせ鐵道や軌道などは急の間に合はないのだから、必ず、陸地は自動車が氾濫するであろうし、又、海上からの臨時船便によつて、大部分の旅客を運ぶより外に、道はあるまい。（つづく）

日 食 の 天 文 學

講師 京都帝國大學教授理學博士 山 本 一 清 氏

（昭和十年八月二日——四日）

（於旭川，講習會要目）

1. 天體運行の種々相
日週運行——年週運行——遊星運行
2. 天體運動論一般
ニウトン力學——二體問題——天體の軌道と其の要素——三體問題——攝動
3. 食 の 種 類
日食と月食——皆既食と部分食——食分——接觸現象
4. 月 食 一 般
5. 日 食 の 現 象
日食の諸相——部分食，皆既食，金環食——接觸觀測——陰影帶——ベイリ粒——色球——紅焰——コロナ
6. 太陽學上より見たる日食の諸問題
太陽の構造——太陽活動——比較太陽學——日食の物理——アインシュタイン論と日食
7. 食 の 週 期
サロス——メトン——章
8. 日 食 の 歴 史
古代の日食——東洋と西洋
現代の日食——其の觀測史——遠征史
將來の日食——豫想
9. 食 の 計 算
10. 食と掩蔽及び太陽面經過
11. 人世歴史と日月食
年代學の基礎